

10 明治5年3月3日 菊池長閑宛

(長閑注記¹)

正月廿九日附之兩通相達拜見仕候御地にてハ愈御機嫌能趣安心

(長閑注記²)

仕居候当朔日玖平を尋委細御様子も承且此度御登セ被下候二拾

兩難有頂き色々御地之形勢御話被下明瞭ニ相分候如何ニも御老

母様ニ之御勤にて御家業十分ニ御改正難被成ハ御尤ニ候併当時

柄諸品高直ニ可有之故御物入も御存外之事も御座候ハん其上私

ハ一ヶ年百円内外之金御資送被下御心勞如何計か実ニ恐入一向

感涙を拭而已にて一言之申上事無之候玖平ニ聞候得ハ一ヶ月七

兩之金以テ四五人之家族ヲ養ニ足趣其を私一人にて遣候事なれ

ハ迎も並々勝れ候位にて厚渥ノ恩愛万一を報するにも不足候故

如何ニも私及丈学業勉励仕天下ニ名を得る様ニ相成御安心被遊

候様致度とは而已日夜心肝に銘居候併護身之御教誠ハ決テ忘却

致間敷候大變災無之ハ一兩年も御資送可被下ト之難有仰ニ候得

共可成丈見込通今年限りト心得修業仕居候 (併) 若限内ニ見込

を達兼候 (得) てハ是ハ私之罪ニ候故仮令滞り無修業仕早く御

安心ニ至候本意ト乍申何時迄も御厄介ニ相成候理も無之且一度

立候目的不遂トテ又も私より願上候ハ男兒之所恥ニ候得ハ不及

西洋各国之如廿歳迄ニ独歩可仕と存居候此度御休役にて難有御

意を御蒙り且御月杯も御頂き之由私ニも大慶ニ御座候女鹿が下

斗米之父ニハ銀何枚とか御頂戴之由ニ承居候此後ハ中々御私邸

之御經濟向不容易に可有之御休役にて大ニ安心罷在候乍去御恩

ハ是非報度物ニ御座候御送方緩ニ御心配被下候難有奉存候先達

も申上候通近頃月俸ハ一ヶ年にて一季分にて証人の好次第

ニ御座候得ハ此度五月迄之月俸収候証人ハ下斗米ニ御座候此度

当十二日ハ諸県人官費之書生東南校にて吟味有之候南校にてハ

三等以下之方之人ハ不残官費御取上之由当校ニ居候人も皆右之

通可相成候諸県ハ我県ハ疲弊も少候故私費にて居る者ハ可有

之候得共一先ハ留学生減可申候自分之為修業する者官費を貫

候理決テ無之ハ当然ニ候得共中々日本未タ西洋之如人ニ其所ヲ

不得故三等以上ニハ当分官費を許等之事有之候以後天下人民各

勉勵して富候様致度者ニ候俸禄ハ有共無カ如ニ候故土族杯ハ今

迄ノ安逸を咎奮て活計を求候ハ当然遠僻地にてハ却て朝廷を怨

候様子可歎事ニ候妹共ノ誦本下し候様被仰越候故尋候処大抵法

律書等之訳本にて兒童之誦様之本見当兼候此度下し候本ハ概究

理図解ト同ニ可有之候得共御誦セ被下度候尚見附可申候代ハ式

分一朱ニ候外日本之国数、人戸口、里数、度数等記候本并ニ新

聞紙二冊下し上候間一見奉願上候近來女学校追々盛ニ相成十六

七迄之着袴之婦人漸々ニ沢山見得候実ニ是迄トハ違夫之恥ル妻

妾出来可仕候先日城ニ入候行者神之諾言を受候故中ニ刀も鉄砲

も当たらずと覚番兵ヲ不恐押通んと致セシ由愚之至ニ御座候此

間之火事にて余程焼失仕殊ニ患ひす屋ハ再焼ニ御座候図を一枚

差上候一〇実ニ無之候得共大概誠ニ御座候

主上八日頃ニ行幸之由実ニ一書生ニして親く拜候事面目之至ニ

候等ニ寄色々之吟味有之由ニ候先ハ首報迄頓首

(長閑注記3) 三月三日 (長閑注記4)

御尊父様

閣下

香一郎拜

当節桜ハ盛ニ候故今日参見物仕候向島之花ハ初て見候て如何ニ
も壯観にて都会丈なから人之出事夥しく候帰途上野も見物仕候
ニ以前トハ違ひ両所共酔倒して狂人ノ挙動を為者只下賤之町人
にて士并上等之商人杯決テ一人も無之昨日天下之あばれ者と唱
候書生すら今日ニ至て只ノ一人も右様之事故者を見実ニ一般
ノ開花ニ進候故かと愉快ニ見物仕候併兵隊杯ニハ少々有之候多
分無智之輩故不得止候当時書生ハ衣服も奇麗ニ致候得共懶惰之
挙動を為者大分稀ニ御座候不一

(長閑注記1) (朱書)

「(第一号)」

(長閑注記2) (朱書)

「(五月五日附を以返書出し但金子一両式朱入也)」

(長閑注記3) (朱書)

「(第一号)」

(長閑注記4) (朱書)

「(五月五日附三号ヲ以返書出し但札一円式朱封入)」

御邸当番女鹿勇え相頼之